

活動20年を振り返って

認定NPO法人 水のフォーラム

2022.4.9

水のフォーラム立上げのエビデンス

埼玉総研機関誌『THINK』で「埼玉の水」を特集

- 出来後すぐの絶版で復刻版作成。宇宙へ行く時代に足元を知らないと気づく。特に「水」に関しては、知っているようで知らないことを知る。

『写真集-長良川河口堰』ほかの作成

- 技術書と反対派の図書ばかり。事業を客観的に語る図書がないことに気づく。市民の立場で事業を考える情報発信の場、「第三の器」が必要と認識。
- 円卓会議を何回やっても、双方最低限の共通言語がなければ議論にならない。議論には共通言語が必要と認識。

河川審議会答申パンフの作成

- 流域単位の総合的水管理の必要性を知る。
- それは本来行政がすることだが、その実現には市民の賛同が必要と認識。



NPO法人「水のフォーラム」立上げ (H13)

自前の編集技術、編集を通じて知り得た河川・水の基礎知識、埼玉92市町村の自然・歴史、それらの活用で何らかの社会貢献ができないか。

- 総合的水管理を意識して、荒川・旧利根川流域の水を網羅する情報発信。
- 総合的水管理最大の壁・農業用水を学ぶため「見沼田んぼ」で実践活動。



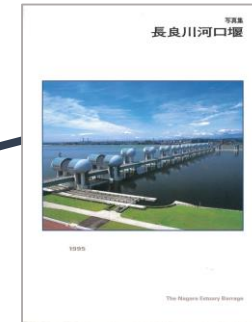
H. 4(1992)
埼玉総研機関誌『THINK』No/34
「埼玉の水」



H. 7(1995)
県河川愛護パンフ
『川の記憶』



H. 7(1995)
滝沢ダムパンフ
『荒ぶる川の恵み』



H. 7(1995)
『長良川河口堰—写真集』



H. 8(1996)
河川審議会答申パンフ
『人と川の素敵な関係』



H. 15(2003)
一庫ダム20年史
『Hitokuradams' Wish』

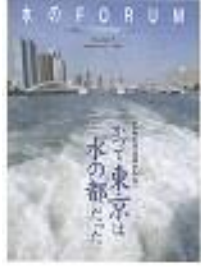


H. 10(1998)
『県勢概要』秩父・
北部・西部・東部・中央
5圏域セット



H. 10(1998)
県河川事業概要
『彩の国の河川
知る知るマニュアル』

『水のFORUM』
1-5



Vol. 1

特集●荒川流域を知る① 「かつて東京は水の都だった」

水を見に行く① 「ローマの水—その文明に文化は生きているか」
「D田んぼ日誌から」



Vol. 2

特集●荒川流域を知る② 「荒川放水路が荒川となって」

行ってきました 「フーバーダム」「トスカーナ」
「D田んぼ日誌から」



Vol. 3

特集●荒川流域を知る③ 「水道の水—秋ヶ瀬取水堰にて」

水を見に行く② 「ローマの水—水の公園を散策」
「私たち小作農から始めました」



Vol. 4

特集●荒川流域を知る④ 「水道水は安全ですか？」

水を見に行く③ 「ローマの水—テヴェレ川流域庁取材記」
「見沼の荒れ地を美田に変える」



Vol. 5

特集●荒川流域を知る① 「荒川の記憶—荒川中流部にて」

水を見に行く④ 「ロンドンの水-テムズウォーター取材記」
「見沼田んぼを黄金色に変える」

『水のFORUM』
6-10



Vol. 6
特集 ● 荒川流域を知る⑥ 「荒川もう一つの旅—六堰頭首工にて」
水を見に行く⑤ 「人類のための水・生命のための水」—世界水発展報告書
「田で学ぶ」



Vol. 7
特集 ● 荒川流域を知る⑦ 「荒川中流部 右岸流域のこと」
水を見に行く⑥ 「ロンドンの水」
「田で思う」



Vol. 8
特集 ● 荒川流域を知る⑧ 「秩父からの便り—荒川流域の祭り・行事」
水を見に行く⑦ 「ロンドンの水」
「田で習う」



Vol. 9
特集 ● 荒川流域を知る⑨ 「緑のダム・都市のダム」
水を見に行く⑧ 「パリの水」
「田で習う 2」



Vol.10
特集 ● 荒川流域を知る⑩ 「下水—その先に東京湾」
「田を支える」

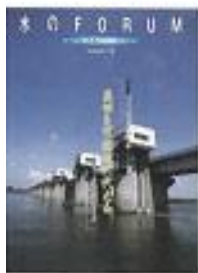
『水のFORUM』
11-15



Vol.11

特集●荒川流域を知る⑪ 「水みちを追って一利根川東遷・荒川西遷と葛西用水」

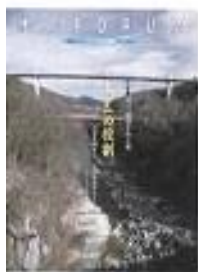
農地での活動第二ステップ 「テーマは循環—2009年度CCM活動報告より」



Vol.12

特集●荒川流域を知る⑫ 「美田を可住地に代える一利根川・葛西用水、その後」

テーマは循環② 「見沼田んぼ見山地区、春から秋へ」



Vol.13

特集●荒川流域を知る⑬ 「ダムの役割—水害を減らし、水道の水をつくる」

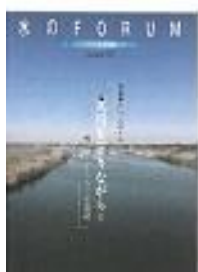
テーマは循環③ 「田んぼだってDAM」



Vol.14

特集●荒川流域を知る⑭ 「荒川を下りながら—源流-中流部」

テーマは循環④ 「水のフォルム INFORMATION」



Vol.15

特集●荒川流域を知る⑮ 「荒川を下りながら—都市施設としての荒川」

「見沼田圃再考」

「秩父大滝と上下流交流③」

『水のFORUM』
16-20



Vol.16

特集●荒川流域を知る⑩ 「荒川を下りながら—入間川水系と古代・中世の河越」

「農業の多面的機能について」

「2016.8.27-28 水源地域と上下流交流④」



Vol.17

特集●荒川流域を知る⑪ 「荒川を下りながら—武蔵野台地の川と新河岸川」

「見沼田圃再々考」

「2017.8.26-27 上下流交流⑤」



Vol.18

特集●荒川流域を知る⑫ 「荒川を下りながら—隅田川と石神井川・神田川」

「見沼田んぼ見山地区で活動—直近10年の記憶」

「2018.8.22 上下流交流⑥」



Vol.19

特集●荒川流域を知る⑬ 「神流川の水—下久保ダムで東京・埼玉の水に」

「水のフォーラム市民田んぼ、今年も多面的機能を発揮しました」

「2019.8.24-25 上下流交流⑦ ハツ場ダム編②」



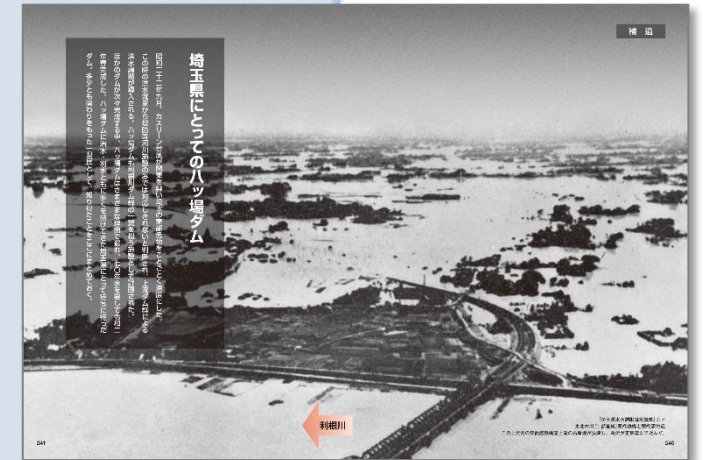
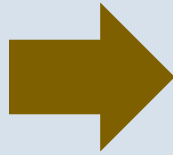
Vol.20

特集●荒川流域を知る⑭ 「水は流域を往く—活動20年学びと気づきの中間報告」

「機関誌『水のFORUM』の発行・配布」「用水・農地保全のために見沼田んぼで米づくり」

「江戸の町づくりが遺した武蔵東部低地の水ネットワーク」「20年の活動から考えたこと」

『水のFURUM』発行を重ねて 流域の水を横断的、総合的に理解する



『水のFORUM』 1～10号特集の合冊で
「荒川流域の水」を集約

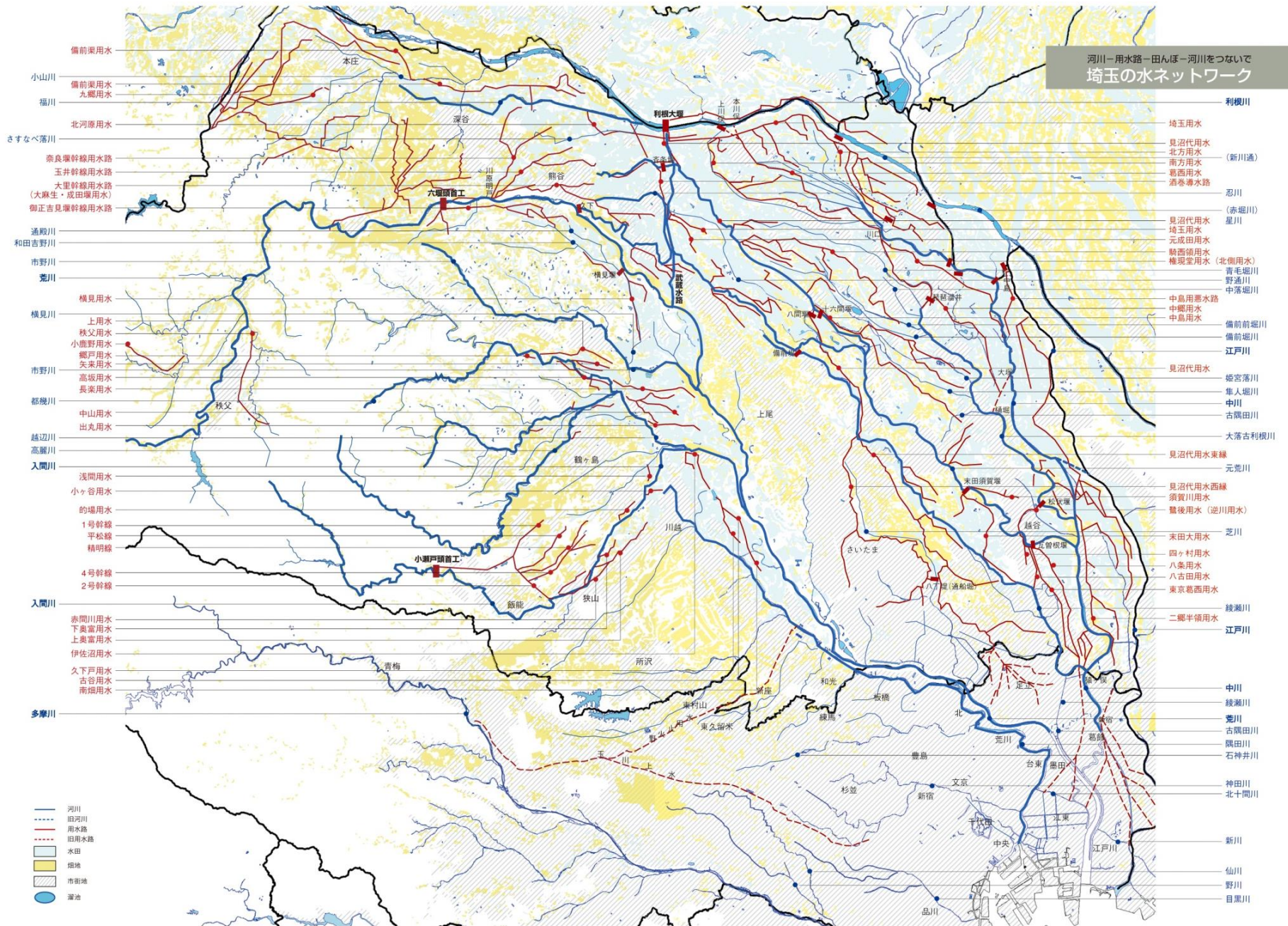
『水のFORUM』 11～20号特集の合冊で
「荒川・旧利根川流域の水」を総まとめ

+

補遺「埼玉県にとってのハツ場ダム」

学習成果 一例

農業用水路図と
河川流路図を重ねたら、
埼玉県土を往く、
自然の水みちが見えた。

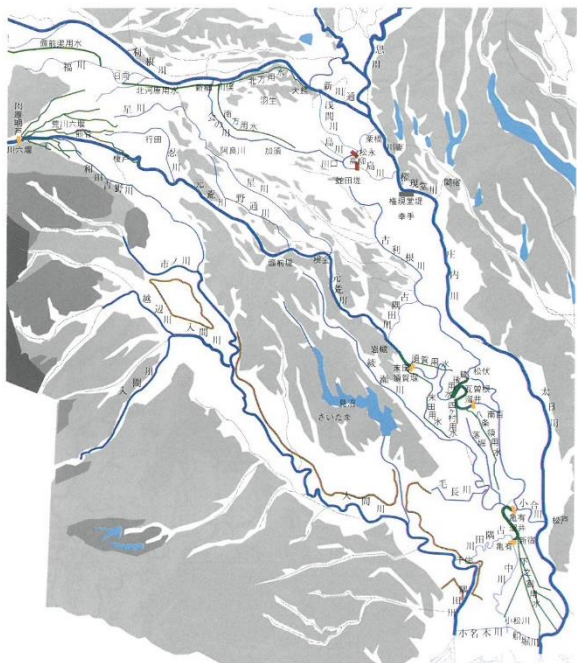


学習成果 一例

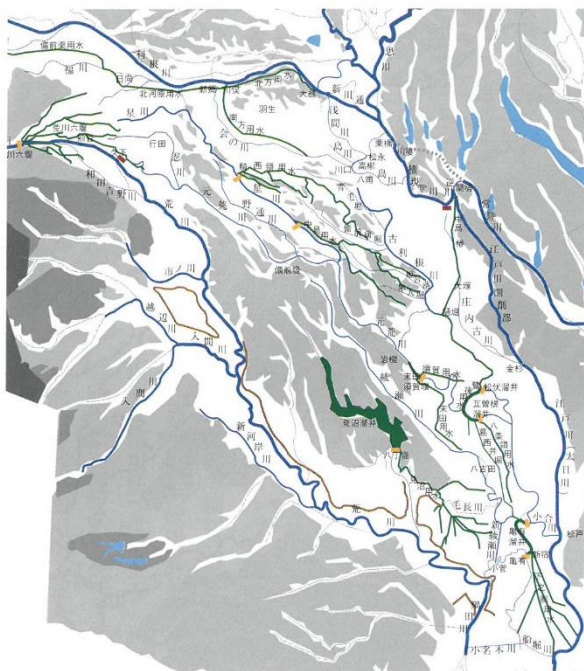
水みちを追って治政学

- 自然の水みちと人工の水みちから、さまざまな歴史的事象を考察。
- 利根川東遷・荒川西遷の事業目的通説に異論提起。
- 埼玉は、奥利根と東京の間に位置して江戸のバッファゾーン、バックヤードだった。地勢上、今も変わらず東京を守り支えている。

開府一元和の頃



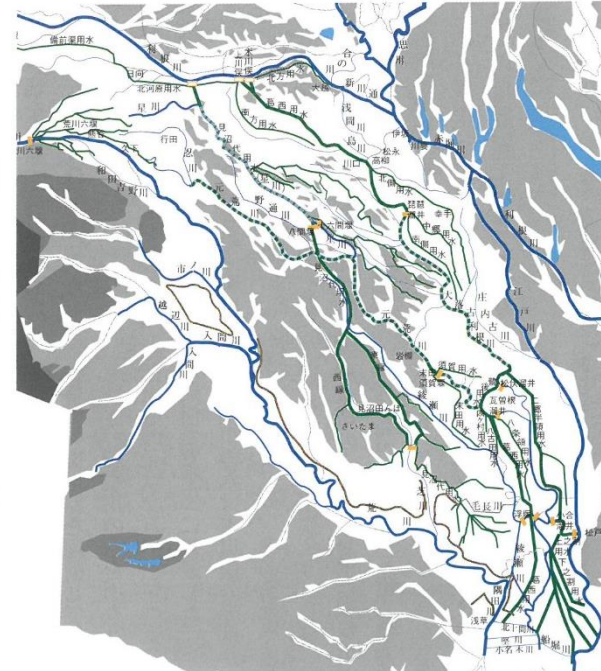
寛永-正保の頃



承応-延宝の頃



江戸半ばの享保の頃



葛西用水と見沼代用水の成立経緯より

学習成果
一例

活動で、暮らしの場で、その規範に「循環」

- 水はつながっている。循環している。循環はぐるぐる回ってゴミを出さない。
- 水の学習でも、日々の暮らしでも、「循環」の視点で考える。
「見沼田んぼ」での実践活動も、テーマは「循環」。
それはまさに見沼農家の「伝統農法」だった。



カッパナシ(雑草を肥料に)



ハサカケ(太陽エネルギー利用)



稲わらウォールの農具舎

実践活動
成果一例

「循環」を実践する里地・里山管理だから、 生き物がいっぱい。

- 「見沼田んぼ」での実践活動は無肥料・無農薬。土を育てて生き物を育てる。
- 生態系の専門家も貴重種があると調査対象地に。
- 2023年度からは「生き物調査・観察会」を本格実施。



2008.9.23里地で観察会



2010.9.23先生を招いて観察会



2014.04.12田んぼにカヤネズミ



2015.6.28里山で観察会



2015.6.28里地で観察会

流域の水を横断的・総合的に見る

水は水源から海まで、流域内でみなつながっている。
この多岐にわたる水を切り取って見ることも大事だが、
水は流れるもの、流動するものとして、流域単位で捉えると、
もう少し合理的に見ること、考えることができる。
でも、その情報発信は誰がする？
行政の水管理は異常時対応。
それも専門ごとに分化されているから、組織設計上無理。
ならば市民がせねば、と思い試行錯誤の20年を続けてみた。

- 水のフォーラムの表彰歴
 - 2011年「緑の愛護」国交大臣表彰受賞
 - 2012年「みどりの日」環境大臣表彰受賞
 - 2014年「日本水大賞—市民活動賞」受賞
 - 2021年「埼玉県多面的機能推進会議」モデル地区表彰
- 『水のFORUM』 収蔵機関
 - 国会図書館、都中央図書館、土木学会図書館、水・河川関係機関等

既成概念を超えた、分かりにくい取組みにも拘らず、
これまでご支援くださった皆様に感謝です。
特に、サイサン環境保全基金のご助成がなければ、
活動の成果を形にして残すことはできませんでした。
誠にありがとうございました。

来年度からは5年計画で、「埼玉の川の履歴書」に取り組みます。
これまで得た知見を活用し、
川の成立ちから最近の取組みまで、記録に残したいと思います。
創刊号は中川①、また一味違う切り口で情報発信ができると思います。
お力添えのほどよろしくお願い致します。